露古の詩　3ツ

午後の思い出

やわらかに倒れていく
　美しい午後
　　わたしはもう立ち上がらない

あの人

あの人がね、その砂の下に私の骨があるって言うんですよ

西風

　西からの風が来るともうなんだか息苦しくて
　はっと目を閉じて耐えている
それでも何かが見えるらしく、ぐぐっと首をすくめた
　鳥の名をいくつか教わった
　　そしてそれが世界のすべてであるように祈った

もう一度言うよ
ぼくは死にたくないんだ